



**早期に有効茎を確保することがポイントです！**  
**①田植え時の注意点と②活着後の浅水管理を徹底しましょう！**

### (1) 田植え

- 栽植密度は、**60～70株/坪**
- 植え付け深度は、**3cm程度**とし、深植えにならないよう注意する。
- 植え付け本数は、**3～4本/株**
- 穂数確保、登熟期間中の日射量確保のため、**5月連休中**に田植えをする。  
**(晩限5月15日まで)**

### (2) 施肥量

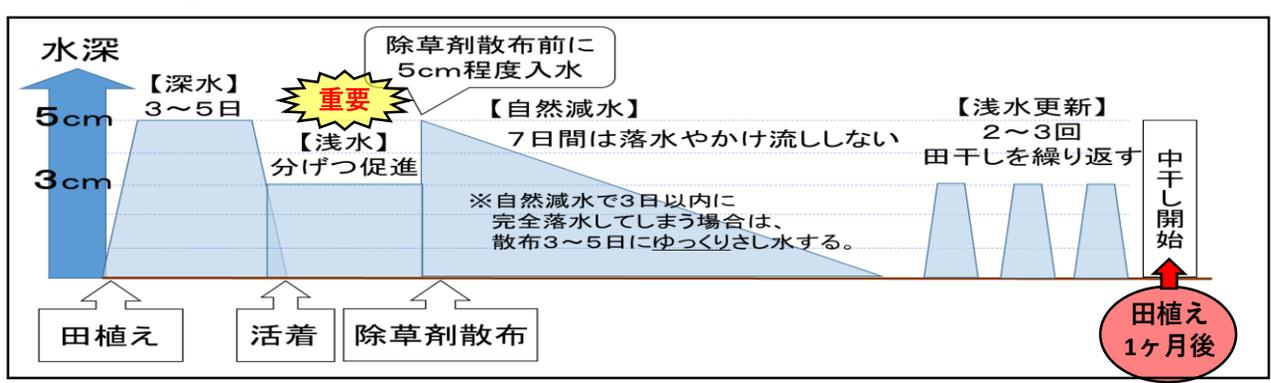
施肥量は、下記を目安として地域やほ場の地力を考慮し、増減しましょう。

移植時期	一発肥料体系 (10aあたり)	備考
普通期移植 (5/1～15)	「ひやくまん穀一発くん」 43～45kg	窒素 12～12.6kg

※前年度倒伏したほ場では、4～7kg/10a程度減肥する。

### (3) 初期の水管理 ～初期分けつ発生 (=有効茎の確保) に努めましょう～

活着後は速やかに**浅水管理 (水深3cm程度)**とし、初期分けつの発生をうながす！  
深水管理を続けると、有効分けつが発生できないだけでなく、  
出穂期も遅くなり、登熟低下のリスクも高まります



### 参考

8.5葉期 (6月中旬) までに穂になる茎を確保するのはなぜか？  
→ 8.5葉期以降に発生した分けつは穂になりません



図 60株/3.3㎡の葉齢展開と茎数の推移 (イメージ)

# ひやくまん穀通信

☆今回はひやくまん穀の魅力をお伝えします☆



## 作期分散できる

品種特性（白山石川地区過去データより）

		出穂期	成熟期
早生	ゆめみづほ	7月21日	8月24日
中生	コシヒカリ	8月3日	9月8日
晩生	ひやくまん穀	8月6日	9月24日

収穫時期の労力を分散できる  
⇒経営面積増加に寄与

例：経営規模20ha（ゆめみづほ5ha、コシヒカリ15ha）の場合

《収穫時期》



## 収量性が高く、コシヒカリ以上の所得確保が可能

稲体の大きなひやくまん穀は、コシヒカリよりも多くのケイ酸が必要ですが、収量性が高い分、肥料にかかる生産コストをカバーできるだけでなく、コシヒカリ以上の所得が見込めます！

10aあたり	ひやくまん穀	コシヒカリ
収量	660kg	540kg
①収入※仮渡金12,900円/俵で算出	141,900円	116,100円
②肥料費(基肥+土づくり)	8,700円+10,960円	8,010円+8,220円
収支(①-②)	122,240円	99,870円

ひやくまん穀はケイ酸補給が必須！  
肥料費はややかかりますがコシヒカリ以上の収量でカバー可能です！

コシ + 22,370円/10a

## ひやくまん穀栽培の作付面積 (ha)

	2017年	2018年	2019年(見込み)	2020年以降(目標)
白山石川地区	60	122	175	250以上
石川県全体	250	638	1,200	1,700

県内一般消費者だけでなく、今後は品種や食味にこだわりを持つ県内外の中食・外食産業へ幅広く販路を拡大し、コシヒカリ以上の生産者所得を目指して、さらに面積を拡大させていく予定です。

ひやくまん穀をつくりましょう♪